

電話代さえ節約したい 若者から「折り返して」

仕事場に最初は公衆電話からかかってきた相談だった。平日の午後、若い男性の声。公衆電話の数が減ってきた昨今では珍しかったので、理由を聞いた。「携帯電話の料金を少なくしようと思つています。番号を教えますから連絡してくれますか」という返事。わずかな時間の応答でも自分の出費は抑えたい、という考えなのだろうか。意味を分かりかねながらも、折り返し電話した。相手は「すみません。甘えてしまって」という言葉づかいと低姿勢な応対から、今どきの若者にはめずらしい律儀さを感じた。

すぐ相談の本題に入るのかな、と思つたが、次の言葉は「静かなところに移動しますから5分ほど後にまたお願いします」だった。

この時のやりとりは――

「今どこにいるの？」

「パチンコ屋の入り口です。うるさくて聞き取れないかもしれませんから」

「そのような場所に公衆電話があるなんて珍しいね。じゃあ5分後

パチンコ依存

第6回

新「相談現場からの報告」

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

若者は癒されるホール通い 借金せず踏み止まれたのは

に

「そうですね。時々使っているお客様がいます。面倒をかけてすみません」

**どんなにうるさくても
孤独になれる場所です**

5分後の電話は意識してパチンコの話から始めた。

「いまパチンコをしていたの？」

「いいえ、きょうはしていません。店の中で休んでいました」

「きょうは？いつもは遊んでいるんだ」

「ええ、まあ、でも……」

「いいよ、詳しく話さなくても。そのような場所で休めるの？」

「ええ、まあ……うるさい方が落ち着きます。それに休憩コーナーではテレビも観れますし、マンガ本もあります。本当は遊びたいのですが……もうお金もありませんから」

「相談したいことと関係があるのかな」

「ええ、まあ……嫌なことばかりあって、どこか遠くへ行きたかったのですが、またここにきてしまいました。どんなにうるさくても、その方が孤独になれる場所です」

しきりに発する「ええ、まあ」

という言葉も気になった。本当のことを話したくないばかりか、話したくても話し方が分からないのか、判断に迷った。

平日の午後にパチンコ店にいることから仕事をしていないのか。たまたま休みなのか。かけようかどうか悩んだ末に公衆電話に向かったのか。思いつきで電話したのか。いろいろな思いが交錯した。

こういう相談者とは電話で話すよりもやっぱり面談したい。表情から考えていることを探りたい。まずその誘導だけにとどめ、必要なことだけ確認しておくことにした。そこで分かったことは――

派遣先でクレーム対応 うまくいかず切られた

相談者はIT系の会社に勤める20代前半の派遣社員。技術系専門学校卒業。就活が思うようにいかず、とりあえずという思いで派遣会社に登録した。派遣先が決まったのは1年前。勤め先の食堂に貼られたポスターでこの相談窓口を知ったという。簡単でいいから、と断って相談内容を聞いた。「2週間前に派遣の更新はしない、

とマネジャーから通告されました。契約期間が1か月残っていました。

システム保守・管理といえども聞かぬがいいのですが、お客さんからのクレーム対応でした。日勤と夜勤のシフト勤務でしたが、毎日10時間以上働きました。クレームはいつも難しいことばかりで、何が何だか分からないのでいつもお客さんを怒らせてしまい、結局は先輩社員やマネジャーの出番になり、迷惑ばかりかけました。残り2週間は雑務という指示。何もやることがありません。ほとんど出社していません。派遣会社も、次の派遣先は難しいな、という態度でした。もうダメです。いつぞ死んだ方がいいと。他人に話しても仕方がないことですが、助けてほしいのです」

時々声を詰まらせながらも、よく話した。ただ、このままの気分のまま電話を終えてはいけない。本心かどうかはともかく、死にたいと語る相談者とは、常に次の日時を約束しなければいけない。「話してくれてありがとう。ゆっくり落ち着いた場所で会ってみるか。会社には行っても行かなくてもいいから」

母と二人だけの生活 「父はいない」原因は

2日後、談話室形式の喫茶店で会った。黒縁の眼鏡をかけたおとなしそうな青年。赤っぽいネクタイをしめ、紺色のスーツ姿で現れた。これには少し驚いた。こっこの反応を察したのか「外出用はこれしかありません。職場では作業着でした」と語った。

「コーヒーでいいかな」
「コーヒーはちよっと……ココアにしていいですか？」

「もちろん構わないよ。聞き方がまずかったね。ご免」

「そんなことはありません。甘いものが好きなんです。連絡してからこんなに早く会っていただいてありがとうございます」

「そんなことはないよ。ちよっと緊張しているようだね。気軽に話し合おう。まず深呼吸をしよう」と、こんな会話でスタートした。平日の午後で客も少なめだった。やっぱり家族構成を知っておきたくていくつかゆつくりと聞いた。その結果、母と二人だけの生活ということが分かった。父はいなくなった、とあっさり語った。失踪

ということか。

ピンとくるものがあつた。ここでいきなり突っ込むべきか、少し様子を見るべきか――この青年からは話が出そうもないのでいきなり質問した。少しオブラートに包んだ表現で。

「お父さんがいなくなったのはパチンコと関係があるんじゃないかな」

ちよっとした間があつた。青年はココアのカップを飲もうとテーブルに伸ばしかけた手を戻してこっちの目を見つめてきた。眼鏡の向こうの目が大きく見えた。

実直な父は事業に失敗 借金返済へホール通い

「どうして分かったんですか」
「いや、何となく思ったただけでね。でもやっぱりそうだったんだ」

「ええ、まあ……」
「いいお父さんだった？」

「さあ、どうだったんでしょうね。いいとは言えないでしょう。地方の金融機関の支店に勤めていましたが、上司の不正経理を本社に通告したら、逆に居場所がなくなつて辞めたと聞いています。不動産業を始めたのですがすぐ行き詰つ

借金ばかりが増えた、と夜の両親の言い合いから分かりました。自分が高校生になったばかりの頃です」

「事業を始められるだけ、やり手だったんだ。お父さんは」

「ええ。働きながら不動産鑑定士の資格を取っていました。社労士も目指して勉強していたようですが、そつちは難しかったみたいで」

「真面目なお父さんだったんだね。なんだか君をみていると、その真面目さが伝わっているように感じるね」

「そうですね：でもそんな父でも行き詰まったら冷静ではなくなっただんだと思います。母から聞いた話ですが、借金を返したくてパチンコに通いだしたのです。家でスポーツ新聞の競馬欄を見ている姿は覚えていますが、馬券を買ったという話は聞いていません。酒も飲まない父でした。パチンコ店が自分の店の近くにあったことも災いしたのでしょうか」

自己破産して消えた父 働きだした母は語らず

パチンコ店の前から相談電話をかけてきた青年とパチンコのつな

がりは、次のような展開だった。「やっぱりそうだったのか」最初にピンときた勘が当たった。

借金を返そうと、追い詰められた状態からの脱出の道をパチンコに求めた青年の父は、ますます借金をかかえこみ、不動産業も閉じた。あまり時間をおかないで、自己破産の手続きをして家を出て行ったという。子供には隠しながら身辺の整理をしたのだろう。

現在どこでどんな生活をしてい

るのか分からない。母は何かを知っているに違いない。母はその後、パートの服飾品売り場でパート職員として働いている。結婚し、青年が生れるまで正社員だったという縁で働くことができた。仕事から離れてからかなりの年数が経過したが、年配の女性客向けの親切な対応が職場では貴重な存在になっているという。

母が保証人になってはいなかったが、父は様々なルートで借金を

していたことで、自己破産後の居場所は母でも分からない、ということ通そうとしていたのだろう、と青年は感じとっていた。母に聞いたはずことはしなかった。

父が通った場所に入り 楽しそうだなと思った

青年にとっては寂しい家庭になった。父と一緒に遊んだり、外出した思い出も少ない。それでも、それだからこそ、とも言えるのだろう。父がつまりいたのは事業に失敗したのが原因だが、さらに追い込んだのはパチンコではないかと青年は考えた。父がパチンコ依存になったことの病的状態を受けとめる冷静さも、知識もなかった。父が通い詰めたパチンコ店ってどんな所だろう。この目で確かめたい。その一途な思いが青年にパチンコ店のドアを押させた。

その初日は夜勤に向かうある夏の日の午後。仕事が待っているのだから自分からやることはできない。店をちよつと覗くだけが目的だった。店内に足を入れた瞬間の外の静けさと中の騒音との落差にまず驚いた。エアコンが効いたほどよい冷たさも心地よかった。ス



ロット機器を見るのも初めてだった。店員らしい女性が「いらっしやいませ」と言ったのかどうか、記憶はない。昼の時間帯なので満席ではなかったが、男性も女性も、年齢層もばらばらで、知り合いらしい人は話し合っていたが、ほとんどは無言で熱中していた。だれも青年に目を向ける人はいない。休憩コーナーには喫煙ルームもあったし、テレビを観ることができた。何だか楽しそうなお店だな、というのが青年のパチンコ店第一印象だった。

遊ぶ金はなくても満足 解放感ある場だった

派遣先の仕事は初めからつまづいた。専門学校で学んだレベルはついていけない内容だった。顧客のクレームの中身も、簡単な説明ではすまないことばかりだった。上司や同僚からバカにされる毎日だった。相談する人もいなかった。「これからの時代にふさわしい仕事ができよかったですね」と母は喜んでくれた。その母に本当のことは言えない。悲しませてはいけない。言いたい孤立感、その苦しみを癒してくれる場所が、「な

んだか楽しそうだな」というパチンコ店だった。夜勤の前だけではなく、日勤を終えてからも、そして数少ない休日も通い始めた。喧騒の世界が、職場の嫌なことを忘れさせた。父がのめりこんだパチンコ店を一度のぞいてみようという、最初の目的は次第に薄れていった。

とあって、遊ぶ金はなかった。台を選ぶふりをして店内を歩いたり、休憩コーナーから熱中する人々を見るだけで満足した。いつも同じ店では注意されるかもしれない、と考えいくつかの店を回った。漫画や雑誌が置かれている店に行く回数が多くなった。長時間いても誰からも何も言われなかった。大勢の中でも孤独になれる、いままです経験したことのない不思議な世界だった。人と話さなくてもいい、という開放感が、青年にとってはこの上ない癒しの場だった。

消費者金融の窓口前で 「母さんの顔が浮かび」

「きょうもまた軍艦マーチから蛍の光までだな。調子がよさそうだ」という会話が聞こえる時もあった。開店から閉店まで店内にいるとい

う意味だとすぐ分かった。この言葉が刺激になった。給料日の後の休日、朝の開店を待つ行列の一人になった。黙ってみているつもりだったが、そうはいかない流れだった。初めて財布を開いた。結果は、自分では大金と思う何枚かの札があつという間に消えた。

しかし、かなり儲かっている人がいることも見てきた。「調子がいい日は誰にもあるに違いない」と、自分勝手に思い、あと1回だけと言いついてやっぱり給料日後の日勤の帰りに、台に向かった。あまり損しなかった。楽しかった一瞬、仕事を忘れた。通う頻度が増してきた。同時に金が消えて行くのも早かった。

パチンコが初体験なら、消費者金融の窓口に向かうのも初めてだった。派遣社員の証明書を見せたかなりの金額を借りることができた。しかし――

「結局借りませんでした。父さんのことが頭をよぎりました。それ以上に母さんの顔が浮かびました」

長い時間を喫茶店で過ごした。その時間があつたからこそ、これだけの話を聴くことができた。話したことで青年もつかの間でもす

つきりしたのではなかったか。話すことだけが目的で電話してきたとも言えよう。自分の能力以上の仕事を求められてダウンしただけだから、スキルに合った仕事を探そう、と語りかけた。安易なアドバースと知りつつ、少しでも前を向いてほしかった。そして――

「君は父親同様に真面目な人だ。でも、借金寸前でもどまったことで、父を超えたと見えると思うよ。自分の人生を切り開けるはずだ」とつけ加えた。

見方を変えれば、パチンコに出会ったことがこの青年を救ったとも言えるのかな、と考えながら別れた。

柏木勇一（かしわざい ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚生省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士